

大陸（満州）

満州でソ連軍抑留

静岡県 楠 正巳

私が入隊したのは、昭和十九年三月、静岡の中部第三部隊（歩兵第三十四連隊の留守隊）の機関銃中隊でした。その後、満州へ行くことになりましたが、二十日間程、天竜川上流の方の二俣の廠舎に宿泊し出発を待っていました。

その後、二俣から列車で博多へ、博多から釜山へ玄界灘の荒海を越えて上陸しました。釜山からは鉄道で朝鮮半島を北上、鴨緑江を渡り満州、北滿の黒竜江省へと着いたのです。

私は大正十二年九月五日静岡県磐田郡上浅羽村浅羽で生れたのですが、在隊一年半で敗戦となったわけで、その時は移動中で奉天の南遼陽の女学校の講堂で仮泊していた。以下その後の経緯を申します。

昭和二十年八月十一日、ソ連参戦のため貨車で熱河省承德を出発しました。

八月十三日、錦州へ着き部隊集結。十四日、ソ連軍と対戦するため、錦州を出発。夜行軍にて遼陽に到着は十六日でした。同時に重要書類の焼却の作業を命ぜられ不安でした。終戦を知らされたのは翌十七日、以後昼夜兼行で書類を焼却しました。

十八日には武装解除となり、十九日武器弾薬をソ連軍に引き渡すため使役に出ました。更に、軍馬を貨車へ積み込むのですが、何処へ連れて行かれるのか、

愛馬との別れはつらかったものです。

二十一日、ソ連軍の命令に従って丸腰のまま遼陽を出発、まことに敗軍の兵の集団です。二十三日、夜間行軍を兼ねて、旧鉄道部隊の跡である海城に着いたのですが、隊伍はもうバラバラでした。二十五日、到着人員の編成替えがあり、加藤大隊が結成されましたが、我が中隊の人数は少ないように思えました。

大隊長からの訓示によって、広島・長崎に原子爆弾が投下されたことを聞きました。そして、「自分達は敗戦によって、これからソ連の捕虜となり抑留生活に入る。何時、日本へ帰れるのだろうか。それまで、何が起るか判らない。各自は体に気を付けて、短気を起こさず、日本のため汚名を残さず、ソ連軍の命令に従ってもらいたい」との訓示は、今なお忘れることが出来ません。

八月二十九日、新しい部隊編成が出来、いよいよソ連軍の作業のため、冬支度を持ってだけ持って、早朝、徒歩で海城を出発しました。三十日、二百三高地の頂上を夜風に吹かれ山越えしたのですが、日露戦争以来、

遼東半島での日本軍の力はここにおいて一挙についたのかと、感無量でありました。旅順港の見える海岸に、ソ連製の幕舎を張り、海水で飯盒炊きをして、苦い御飯を食べたことも、昨日のように思い出されま

す。

九月一日、いよいよ作業開始です。旧日本軍教導学校跡のソ連軍兵舎の清掃作業より労役につきましました。少し手を休めても、若いソ連兵の銃把でなぐられる。便所へ行くにも言葉が通じないので、手まねでやっと解って貰う始末です。行こうとすると、我も我も行くとうとするから、集団逃亡と間違えられ発砲される。これが、当初の記憶に残っています。

八日、作業が終了したので旅順を出発、また夜行軍です。翌九日、大連港の真北方向の波止場と記憶する甘井子の倉庫のような所へ入れられました。

十日、満州化学（満化）の大型機械の解体作業である。道具無しで全て人力による作業で、十トンもあるような解体した機械を、ロープを付けて、波止場に待機するソ連の貨物船の下まで引っ張って行くのです。

交代制でやっても、どの作業も大変で、体力の有る者だけが何とか続けることが出来ました。

我々日本兵は泥棒ソ連国の手伝いで、少しでも余計にモスクワに送りたいという、ソ連将校の命令です。

そのため、ソ連兵も混じっての急ぎの作業でした。また、大きな会社の工場や倉庫に蓄積してあった肥料など、寒さが身にしみる頃には空っぽになっていました。

十一月二十六日、再び移動を開始、甘井子を後にしました。今度も夜行軍、以前より体力が落ちていたことがはっきり判ります。遼東半島を北方へ行くようです。真夜中の雪の上で、仰向けに倒れて空を見上げ、これから先どうなっていくか、つくづくと考えたことを覚えていきます。足の冷たい夜でした。

二十八日、長嶺寺という所に到着、中国の農家の小さな部落で、あたりは一面の畠と野原です。今度は何をやらせるのか、ふと気が付くと、我々の部隊も編成当時よりは人数も減ったような気がします。

編成替えによって、以前の戦友とは別れ別れとなり、新しい分隊では二〜三人の気の合う者しかいませんで

した。皆の心は荒れ果てて、賭博が流行し始め、各所で盛んに開帳していました。そのため、昼間の疲れでぐっすり寝込んだ頃、物取りがあるのです。誰かが盗むのです。これから寒さと戦わねばならぬのに、夏服でふるえている者がでる。また風呂に入らないので体がかゆい。抑留生活はこれからもっと厳しくなっていくわけです。

三十日、いよいよ作業に出発する。今度は飛行場造りの労役です。見たところ、相当の凸凹です。初めはモッコ担ぎで土砂の運搬。高い所から低い所へ、夏草も枯れて冷たい風が吹いて来る。体を動かさないと寒さに耐えられない。

十一月も過ぎると、毎日のように吹雪の中での作業です。監視の目は厳しく容赦なく制裁を加えて来る。作業を終えて、寝ぐらに戻れば自分との戦いが始まる。給与は悪いし、環境はこの世とも思えない。唯々、寝ることだけが生き甲斐でしたが、これも腹がへって眠れない。

うとうとした頃にもう叩き起こされ、作業出発に急

がねばならない。飛行場への道中は長い、それだけ余分な時間がかかる。昼食は皮付きの高梁の雑炊です。黄塵の中を荷馬車に載せて運んで来るのですが、ほこりと小石で、ガリガリとして、とても喉に通せない。水分だけが飲み込んで後は捨てるより外はなく、そのうえ、作業もだんだん量が増えてきました。手足の垢も黒光りする。

年も明け、昭和二十一年元旦である。今日は正月休みらしい気分になり、ツルハシで河の水を割って、其中で体の垢を落とそうとするのですが、垢は取れない。しかし、身を清めた気分は良いものです。久し振りで身に着ける軍服で、部隊全員は遙か祖国を拝み最敬礼をします。我が村、我が家はどうなっているのだろうか。抑留生活、最初の正月の思い出です。

一月になり、また寒さと戦いながら、きつい労働が続いて行きます。雪とほこりが混じった土で穴ボコを埋めて平になった所から鉄板を敷き始める。これにはソ連の兵隊達もまじって作業をやるのですが、彼等は専門の兵であるし、栄養もとっている。相棒となる

我々はほんとうにみじめです。

三月も二日になった。かねて噂に聴いていた特殊技能者の募集がありました。大工・左官・ペンキ・電気屋・鍵作り、と十三名で、行く場所は不明でした。本国へ連れて行かれるとか、シベリアとか、二度と帰れない噂に志願する者もいなかったのですが、私は早くからロシア語を覚えたいと思い、手まねをしながら、日常会話を心得ていましたので、ソ連兵の話す様子を見ていて「大連」(ロシア語で「ダウヨウコウ」という。また「大工」のことを「プロワニキー」という)という話を判断して「大連港」の方面に行くのだと思ひ、日本へ帰れる港だと、何んの気もなく一番乗りで手をあげました。

後の者は職業別に募集され、いやいやながらソ連将校に引き渡されました。我々一行は、また別々の分隊から、海軍もいれば年配の召集兵もいる十三名の集まりで、原隊よりは一人隔てられたことになるので不安でした。

トラックに乗せられ、自分達の行く先、何が起こる

のか判らない。其の日のうちに到着したのが、大連市星ヶ浦の旧満鉄官舎の別荘宅、大きな屋敷の門構えである。我々は鉄筋コンクリートの小さな小舎の中へ押し込められて、外から錠を掛けられ、歩哨兵が二人付きました。これには脅かされました。便所も行かして貰えず、十三人寝る場所が一杯で動きがとれないほどです。

三月三日、節句の朝、ソ連技術将校が、食事運搬兵と共に現われた。名前は「リワノーフ」中尉で、これからの作業の指示者です。手まねで話をしたところ、旧日本の別荘を、ソ連将校の官舎に模様替えするための我々十三人であったのです。

給与の方はソ連兵と同じ物を食べさせて貰えるとのこと、付近には日本人が沢山いるから、話をしてはいけないとのこと、監視歩哨を必ず連れて行動すること（他のソ連部隊に連れていかれるので）など、だいたい理解出来ました。

他の仲間は全部本職で、私一人が偽の大工であるが、本職人が一人いたので、何とかソ連兵をごまかすこと

が出来ました。とにかく、大工道具が逆で、これには本職の大工さんもお手上げでした。他の者も、レンガを積んだり、ペンキを塗ったり、また電気工事をしたりです。それに、ソ連兵の作業隊も混じって建築の作業を続けました。

気候も大分暖かくなり、作業にも馴れてきました。

一人歩きも出来るようになり、ソ連将校の奥さん達とも顔馴染になり、私のロシア語も話すだけは通じるようになってきました。奥さん達からも食物を貰うようになり「モルダー」（これはロシア語で「おデブ」という意味）の仇名で呼ばれる程に私の体調は良くなりました。ある日、私達の仲間から逃亡者が出ました。私達は罰則として重労働に行かされました。場所はセメント

工場で、ドイツ製の大型トラック（タイヤの背丈が私より大きい。四十五トン積みとか聞いた）がある。その車に二名で、セメント袋を山積みし積み作業でした。昼食も貰えず、その苦しいことは今でも忘れられませんが、それから倉庫の片付け、これも苦しい作業でした。

六月二日、私達はなお労役のため、大連市星ヶ浦を

離れて、永常子という所へ送られ、飛行場建設の土方仕事として労働をさせられました。幕舎暮しで、暑さと疲労のため、また逃亡者が出る。私達は、ソ連軍大佐に炎天下裸で立たされ、ピストルの銃口を向けられました。何やら、腹立たしいらしい早口で威嚇するのです。我々は皆顔色が青ざめ、冷汗びっしょり。殺されることはないと思ったのですが、五時間以上も夏の炎天下に立たされていれば、このことは忘れられない事件の一つです。

七月十七日、永常子からトラックでまた、どこかへ連れて行かれました。その日の夕方、三十里方の飛行場の建設現場に到着しました。此処には大勢の部隊がいるらしい。編成当時の我々の本隊も、長領を引き揚げて此処へ来ています。作業規模も大きく、北側に石山を持っており、他部隊は山の石掘りに行っているのですが、毎日午後の一定時間にハッパの大音響がします。犠牲者も多いといっていました。

我々は本隊には戻れず、別の幕舎が用意されました。作業は本隊の後について行って、ソ連兵のトラックで

運んでくる生コンを降ろして、平らにする作業です。私は下駄を履いて、毎日その仕事に通いました。

旧師団司令部当時の戦友とも再会出来て、内地に帰る話ばかりしていました。月夜の晩には、夜遅くまで語り合ったことも思い出します。大きな部隊の中で歩哨もおらず、作業以外は自由でした。休日には有志の者達の演劇も見られ、抑留生活では落ちついた時でした。

秋になって、また寒くなってきました。夏衣だけしかない戦友もいたので、私は持って来た布きれで「チョッキ」とか「ズボン」を造って、寒そうにして、いる戦友に与えたりして、余暇を自分の趣味で過ごし、ひたすら帰る日を待っていました。

十一月三日、明治節の日を覚えていた。再度、大連の作業指示者「イワノフ」ソ連軍将校が我々を引き取りに来ました。今度は、欠員に対し、我も我もと志願者が出ました。いずれも偽職人が多く、「くじ」で決めようです。今度は電車で地方の日本人と同席で、何となく変な思いで忘れられないことです。

夕方近く、大連市内の旧関東軍倉庫に落ち着きました。約五年は戦っても良いという関東軍倉庫は、レンガ造りの立派な倉庫が幾つかあったけれど、どの倉庫も何者かに荒されて見る影も無い状況です。あちこちに散らかった襟章の黄色い星があわれに見えました。

作業は前と同じで家の修理仕事が多かったです。

作業の仲間も少し増えて二十名位だと思えます。元下士官もいたけれど、私が一番ロシア語が出来るのと、前からいたこともあってカマンデーラー（責任者）みたいなことをやれと言われました。年は若いですが、作業の指示伝達係みたいなことをやっています。

種々の道具も増えて、持ち運びが大変だったので、箱に入れて作業現場へ置いて来る制度をとっていたが、朝出向いてみると箱ごと道具は盗まれました。私は直ぐソ連将校に報告しましたら、厳しい体罰を受けたことも忘れることは出来ません。

二十八日、電車で再び星ヶ浦に戻りました。今度は海岸端の空家らしい日本風平屋建の家に入りました。広々とした家です。ドラム缶で風呂を作り、電灯もあ

り久し振りの人間らしい生活です。治安も良くなり一人歩きも心配いらなくなりました。

作業も道具箱が無いので毎日が製材作業になりました。シベリアから来た丸太を板に加工する作業です。二人用の大鋸で丸太を横に据へ、上下で引いたり押したりして切って行くわけです。楽な仕事ではなかったのです。そのうち、道具も段々と増えてきました。

十二月十一日だったか、雪の降る寒い日だったと思います。私たちはまた移動することになりました。大連の方向で黒龍確という地名で、これまでの日本家屋での電気暮しから、ローソクの光で過ごすようになりました。

抑留二度目の正月も、知らぬ他国で祖国を偲びつつ過ごさなければならなかったのです。作業は机や椅子のような物を毎日作っていた記憶があります。他の職人達は外の作業に出かけましたが、私達四人は寒い雪より逃れて家の中で作業をしていました。

二月も過ぎて帰国の話をソ連将校より聞き、半信半疑に思っていました。三月間近だと思おうのですが、大

連の関東軍倉庫へ集まれとのこと。何もかも投げ捨て、身支度もそこそこに其処を出発しました。倉庫には、もう皆集まっていました。我々の仲間はまた此処でも分散して十名足らずの半端者となり、本隊とは乗船も一日遅れてしまいました。

編成がまたあり、知らない部隊の後に続いたが、其の時の小隊長も見ず知らずの人で記憶から消えています。帰国後尋ねた戦友はもう亡き者が多く、長い間年賀状だけの文通の方が一名だけになってしまいました。

満州で終戦を迎えた部隊は、ソ連の不意の侵入、防御まだ完たかならぬうちに一方的に攻撃を受け、国境警備隊の多くは玉砕に近い犠牲をはらったのですが、内部の部隊、関東軍総司令部等からの、指揮命令が充分下達されず、混乱のうちに敗戦、ソ連抑留となったのです。その数六、七十万人と聞きました。

そんな状況の中で、私たちの抑留体験というのは特異なものであったといえます。我が隊が若し、ソ連の奥地へ連行されれば、私も酷寒の地、しかも給与の悪い中での重労働で内地の土を踏むことは出来なかった

かも知れません。

しかし、満州でのソ連抑留者で死亡した者も多かったのです。満州で逃亡したり満人の農奴となり、その行方も知れぬ人もいます。軍隊は連隊であり、特に終戦後の満州の軍人、一般邦人の惨禍はその人、その時、その場所で分かれたので、今でも私は良くぞ帰還出来たと思っています。

満州清明村開拓団

— 南方独混三七旅団通信隊 —

岐阜県 勝 智

私の戦時中の行動は、満州と南方ではありますが、満州では、清明村開拓団及び関東軍第八国境守備隊、南方は印度洋ニコバル諸島での通信隊（鍛第二五六八部隊）独立混成第三十七旅団）での戦務、終戦後はレンバン島抑留となります。

清明村開拓団と満州の軍隊教育